

基調講演

これからも学校教育・地域教育－多様な主体の対話から始まる価値創造－

劇作家・演出家・青年団主宰 芸術文化観光専門職大学学長

平田 オリザ

こんにちは。平田です。よろしくお願いいたします。私、本業が劇作家、演出家で、お芝居を作るのがいちばんの仕事で、消費者教育とは全く縁がないものですから、なんで呼ばれたのか、ちっともわからなくて、ずっと何度も「これ何を話せばいいですか？」と聞いて、「教育の話で良いですから。」と言われました。会場に着いてからも主催者の方に、本当に教育の話か聞くと、「あの消費者教育は幅が広いので。」と言われたんです。でも今、行政説明を聞いて、ますます場違いなところにきてしまったなど。ですから私の話を聞いた後に、全然関係ないんじゃないかと思われたら、主催者の方に文句を言っていただければと思います。できるだけ、皆さんの日ごろの活動のお役に立てるようなこととお話したいと思います。普段、私は劇作家として、特に国際共同の芝居とか、海外の劇場でも仕事をしてまいりました。一方、作家なので、小説とかも書いたり、映画を作ったりしています。一昨年4月には、兵庫県の豊岡市に県立の大学で、芸術文化観光専門職大学という日本で初めて演劇やダンスの実技が本格的に学べる公立大学が開学を致しました。これの初代学長に就任をしました。それ以外に、小・中学校の国語教科書を作るお手伝いをずっとしてきたので、今もだいたい年間30校から40校ぐらいは、小・中学校、あるいは高校に出向いて、演劇的手法を使った授業をしています。大学でもこういったワークショップ形式と呼ばれる授業を国内外でしてまいりました。演劇的手法を使ったコミュニケーション教育といっても何のことか、ご理解頂けないかと思うので、どんな授業をしているか、少しお話をしたいと思います。これは実際に今使っている中学校の国語の教科書です。これが実際の教科書で、これは私が普段使うプリントですけど、ちっちゃくて読めないと思うので、読みますね。「六人用 朝の教室生徒たちが登校してくる。教室はワイワイとうるさい」生徒4「ねえねえ、昨日×××みた？」これ×××にはテレビ番組の名前が入るのですが、ちなみに国語教科書は、生徒1「ねえねえ昨日×××みた？」になっていますが、なぜ、教科書は生徒1で、私のプリントは生徒4になっているかというと、これは中学生向けの教科書なんです。日本の中学生は、すごくシャイなので、いちばん最初に「生徒1」があると誰も「生徒1」をやりたいがらないのです。「生徒4」をいちばん最初にしておくと子供たちは、なんだかよく分からなくなってじゃんけんで決めてくれる。細かい工夫がなされています。この×××にはテレビ番組の名前が入ります。ここで、フィクションとは何かと、いう話をします。「今日の授業は劇を創る授業なので、授業中に嘘をついてもいいよ。」と。「普段の授業で授業中に嘘をつく先生に怒られるけど、今日の授業はうまく嘘をついた子が褒められるよ。」と話します。少し解説をしておきますと、



日本はこういったクリエイティブな授業、クリエーションの授業というのは、極端に少ない国なのです。音楽という科目はあるのですが、高校になっても作曲という単元はないのです。美術、中学になるとデザインが入ってきますけれども、やはり写実・写生が中心になります。国語・作文はもとより、俳句・短歌の指導でも自分の心を詠みなさいと教えられるわけです。これ、私たちのような作家になる人間にとっては苦痛でしかないのです。なぜ、嘘ついちゃいけないのかがちっともわからない。私の知人で平野啓一郎さんという小説家と話をしたときに自分もそうでしたと。彼は、小学校4年の時に完璧ないじめに対するフィクションの作文を書いたらしいのです。全部勿論、登場人物は架空の人です。ですが、あまりにその作文が完璧だったので、先生方はこれ絶対本当のことだろうと思い、かわりばんこに平野さんのところに「平野、俺には本当のこと言っていていいぞ。」と言ったそうなのです。要するに私たち作家は、人を楽しませるために嘘をつくわけです。その方が楽しいじゃないですか。人を楽しませるじゃないですか。これダメなのです、日本の学校教育では。フィンランドメソッドが、一時話題になりました。消費者教育でもフィンランドは、先進国ですが、国語教育でもフィンランドの国語の教科書が翻訳されて出版されています。小学校4年生のある単元で、子供が家を出てから、帰るまでに何があったかをお母さんに話すという長文があり、そのこのひとつの目当てに「この中でこの子が嘘を言っている部分と大げさに言っている部分を塗り分けましょう。」という課題があるのです。これは、綺麗に塗り分けることが目的の課題ではないのです。大げさと嘘の境界線は人によって違うということ、小学校4年生に理解させるための単元です。これ見た時に、「ああ、こういうのがあったら自分は楽だったな。」と思いました。私は、ずっと子供のときから嘘つきって言われてきたからです。僕は、人を楽しませるためにちょっと盛って話をしているのです。これは、「うそ扱い」になってしまいます。ご承知のように、欧米、特にイギリスですとエリート校ほど、中学、高校で「修辞学」という学問が始まります。これは将来弁護士とか政治家になるようなエリート層が受ける授業です。要するに政治家や弁護士は嘘を言っはいけないのです。しかし、盛って話す技術が要求される。この嘘と大げさの境目をきちんと区別することは子供にとって非常に重要な能力なのですが、日本ではこういう授業がない。でもここまでお話しすればわかると思いますが、要するに消費者教育とは、そういうことでしょうか。騙されないって、そういうことでしょうか。企業は物を売りたいのです。それは大げさに宣伝しますよ。でも、嘘をついちゃいけない。その境界線をきちんと理解させる為には、フィクションだということきちんと理解させる必要があるのだと思うのです。これで今日の話は終わり、良かったです、義務が果たせて。あとはもう好きな話をしますね。

これを説明しないと、本当に、「昨日テレビ見てません。」という子供が必ず出て来ます。日本では、授業中に嘘をついてはいけないと教えられているから。これでは、対話型の教育なんてできるわけがないですよ。後でも触れますが、ここにフィクションの力を入れていくことが大事だと思うのです。少し先を急ぎます。このスキットは、先生が途中から転校生を連れて来て、長野から来たという話になっています。「趣味は何ですか。」、もっと面白いことにして、「前の学校でスキー部にいました。」で、先生が廊下に退場して、「スキーってうまいの?」、「そんなにうまくない。」「でもスキー部だったんでしょ。」こんな流れで1時間目は、少しずつセリフを変えてやってみるのです。面白いのが、変えすぎちゃう班とかが出てきます。静岡に変える班とかある。

「趣味は何ですか?」「もっと面白いこと聞けよ」「前の学校は、スキー部にいました。」まあ、静岡でも御殿場の方や私立だったらスキー部のある学校あるかなと思うのですが。次のところで、「スキーってうまいの。」「そんな上手くないけど。」「でもスキー部だったんでしょ。」「静岡じゃみんなやるから。」、ここでみんな「ええっ。」となるわけです。でも1時間目にこういう班があると教員の側としてはありがたいですね。「今のちょっと変だったよね。静岡に変えたチャレンジはよかったけれど、みんなここで「ええっ。」ってなったよね」。

「さっき、嘘をついていいと言いました。でも、嘘をついたから褒められるのではないのです。うまく嘘つかないと褒められないのだよ。嘘ってすぐばれちゃう。だから頑張って全部つなげていかなきゃいけない」。こんな話をします。国語的な要素も入ってきます。例えば、ここをテニスに変える班とかがあります。「そんなうまくないけど。」「でもテニス部だったのすよ。」、ここはだいたい変えるのです。「長野じゃ最近流行っているから。」とか。でも、次ですね。「テニスってやったこと?」「あるよ、三回ぐらいだけ。」「いいな。私やったことない。」「私もない。」「じゃあ3年生になったら行こうよ。」「行こう。行こう。」さあ、これはどうだろうと。意味は通じたけど、なんかちょっと変だったよ。「スキーは、行こう行こうだけど、テニスは何?」「やろう、やろうだね。」。嘘ってこういう小さなことでばれてしまいます。だから、こういう細かいところまで全部変えていかなきゃいけない。一人で作文を書くときには、こんなこと起こらないでしょう。自分の脳みその中で書くから。でも、演劇は、相手がセリフを変えたら自分も変えていかなきゃいけない。リレーのバトンを渡すみたいに言葉のバトンをしっかり渡していく、しっかり受け取っていくのだという話をします。2時間目にはこのワークシートを使って、全部自分たちで劇を作って、3時間目に発表する。これだけの授業です。僕はできるだけ離れて見えています。2時間目もです。当然、授業ですから、停滞している班にアドバイスに行きます。例えば、朝に先生が来るまで何の話をするか決まらない班があります。その時、子供達に何を話すと聞くと、みんなシーンとしてしまいます。でも今朝、何を話した?、いつも何を話すの?と問いかけると、誰でも答えられるのです。要するに話し言葉は、本来ハードルが低いはずなので、自分の体験からだったら色々発想ができるのです。現実には、優等生的な子供が「宿題の話をします。」「運動会が近いので運動会の話をします。」と決まっています。しかし、当然黙っている子供がいます。黙っている子供に「君、今朝何を話した。」と聞くと「話さない。寝ていたから。」という子供がいます。「あっ、いいね、いいね。寝ている子の役にしようか。」となるわけです。もっと黙っている子供もいます。もっと黙っている子供に「君、どう?」、と聞くと「いない」という子供もいます。「遅刻ギリギリにくるからいなかった。」と言います。「ああ、いいね、いいね。じゃあ遅刻してくる役にしようか。」となるわけです。3時間目の発表になります。そうすると、みんなが真面目に宿題の話している班より、宿題の話をしている横で突っ伏して寝ている奴もいれば、ああ、やばい、やばいって途中から遅れて入ってくるやつもいる班の方が演劇としては圧倒的に面白くなります。その時に子供達は、ああ喋らないことも表現なのか、いないってことも表現かもしれないと気がついてきます。表現の概念自体が広がる瞬間があります。ただ、これ従来型の国語教育からすると少し逸脱したものです。文科省が定めた国語教育の柱は四つ「読む・書く・聞く・話す」です。読む、書く、聞く、話す、話さないというのはないのです。まして、読む、書く、聞く、話す、話さない、いない」となったら、授業ではなくなります。でも、私たちアーティスト

トからすれば、話さないっていうのは立派な表現です。いないということも表現かもしれない。アーティストが学校教育に入るのは、こういった従来型の計画に揺さぶりをかけるのが、一つの役割かなと思っています。さて、こういった教育が今、全国に広がりつつあります。兵庫県、私の住んでいる豊岡市内 34 の全ての小中学校で、こういった演劇教育を導入しておりますし、今年度から宝塚市が全ての小学校で導入しております。こういった全校実施の自治体も増えてきております。いろんな理由があるのですが、一つ、大きいのはやはりこの大学入試改革です。これは、今日の主題ではないのではしよりますが、大学入試改革、文科省の方を前にして申し訳ないのですが失敗したわけですけど、文部科学省が悪いと僕は思っていないんですが、この点は後で説明します。共通テストが昨日ありました。文科省はきわめて基礎的なものにする、最初はそう言っていました。何度も受けられるものにもしたいと。大学側には、潜在的な学習能力、大学に入ってから学びの「伸びしろ」を図るようと文科省からは言われています。それはどんな能力かということ、今までも言われてきた思考力・判断力・表現力ですけども、最近急に言われ始めたのは、この主体性・多様性・協働性です。これを文科省は、学力の三要素としてきました。知識や技能を土台にして、思考力・判断力・表現力を身に付け、主体性・多様性・協働性を伸ばしていきます。では、これをどうやって測るのかということです。特に主体性と協働性は、時に相反します。私は、四国学院大学で学長特別補佐を長くしてまして、5・6年前から、大学入試改革の前倒し実施をしてきました。どのような問題を出すかも発表しています。例えば、レゴで巨大な艦船を作る。これは、10年ほど前のオックスフォードで実際に出題された問題のようです。8人一組になってレゴで巨大な戦車を作る。設計図を描いて、役割分担や作業手順を決めて地道な手作業も厭わない。いろいろな能力をみる試験です。消費者教育に近いところで言うと、AKBともクロのダンスを実際に踊ってみて、それぞれのビジネスモデルの違いについて考える。関西のある高校で、10年ほど前に計画した授業です。ももクロとAKB、10年前ですから、妖怪ウォッチを踊ってみてビジネスモデルの違いについて、高校生に考えてもらう。AKBは、みんなのアイドルなので、みんなが踊れるダンスでなければダメなんです。だから以前、「恋するフォーチュンクッキー」をみんなで踊って、youtubeに上げたでしょう。薄く、広くCDを売って行く商売だからああいうことになっているのです。ももクロは10万人のファンクラブを囲い込み、その人たちがライブに来て2万円、3万円のグッズを買って帰るという応援型・育成型のアイドルです。だから応援したくなるようなダンスでなければダメなのです。実際に踊るとすごい汗をかきます。妖怪ウォッチは、子供が妖怪ウォッチを買うのではなく、お父さん、お母さん、あるいはおじいちゃん、おばあちゃんが買ってくれるのです。だからおじいちゃん、おばあちゃんから見て可愛く見えるダンスでなければダメなのです。

今ダンス好きな子が多いですね。男子でも相当踊ります。そのダンスが得意な子、好きな子に「君たちが踊っている。あの楽しく踊っているダンスも裏側に大人の醜いビジネスモデルが張り付いている。君たちは、まさに踊らされているのだよ。」ということを教える。これはダンスが得意なタイプの子に、社会に向けて関心を持ってもらう非常にうまくできた社会科の先生と体育の先生の教科間連携の授業です。こういったことが大学入試が入ってくるのではないかと。どんな能力を見るかも発表しています。自分の主張を論理的、具体的に説明できたか。これが主体性ですね。一方で、タイムキープを意識し、議論をまとめることに貢献した。これが共働性、共に働

く力です。これ両方ないとダメですよということです。どんな問題を出題したか一つだけ紹介します。以下の題材でディスカッションドラマを作りなさい。2030年に日本が財政破綻債務不履行の状態になり、破産するとIMF国際通貨基金の支援を得ることになります。国際通貨基金からの支援の条件として、「本四架橋が三本通っていますが、その二本を廃止しなさい。どの二本を廃止しますか。」兵庫県、岡山県、広島県、香川県、徳島県、愛媛県の各県代表と司会1人の7人一組で、ディスカッションドラマを作りなさい。四国学院大学は、毎年このレベルの問題を出題しています。なぜ、出題できるかと言うと、7人一組なのですが別室に連れて行かれるとコンピューターが二台置いてあります。全面検索可です。全面検索可にした日本で最初の大学入試です。要するにこれはディベートではないので、自分の意見を通すことが目的ではない。全体のパフォーマンスが上がることに、どう全体に貢献したかが図られる試験です。上位の子供は、奨学金がもらえます。要するに、大学が、高校生を選ぶ時代ではなく、それよりも10人受けたら8人ぐらい受かる試験なので、10人の内1人だったら俺が俺がと自分の能力を発揮しないとイケませんが、10人のうち8人が受かるのですから、全体のパフォーマンスが上がることに貢献できるの方が評価の基準になると言うことです。当然、そのディスカッションドラマを作るのですから、妥協や諦め、裏切りとかがないとダメなんですね。

地理に詳しい方は、お分かりだと思いますが、兵庫県と徳島県が明石海峡大橋と鳴門大橋で繋がっています。香川県と岡山県が瀬戸大橋で繋がっています。広島県と愛媛県がしまなみ海道で繋がっています。検索すれば交通量、通行料、輸送量等、全部数字で現れます。瀬戸大橋と明石海峡大橋は拮抗しているのですが、瀬戸大橋は三本の中で唯一鉄道が通っています。常識的に見れば、瀬戸大橋を残します。誰でもそう考えます。兵庫県ピンチです。私は、兵庫県民なので、私が兵庫県の代表だったらIMFの代表団に「明石海峡大橋だけ残しましょう。」と言うと思います。徳島を切って捨てます。明石海峡大橋の特徴は、他と違って県内でまたがっている橋なのです。だから兵庫県としては、徳島を切って捨てても明石海峡大橋単独だと一番通行量多いのです。IMFには、「これだったら費用は、1/3ではなく、1/6になります。」と言うと思います。さあ、瀬戸大橋ピンチです。次に裏切るのは愛媛県だと思います。愛媛県の西条市に巨大な鉄道博物館があります。新幹線がいくつも飾ってあります。四国にまだ新幹線がないのにです。なぜかと言うと、「新幹線の父」と呼ばれた十河信二さん旧国鉄の総裁が西条市の出身で、いまだに四国の方たちは四国新幹線が通ると信じています。四国新幹線が通ると一番得するのは松山です。一番東京からの時間が短縮されるのです。徳島や高松より、高知よりも短縮されます。このようなことはネットで「四国新幹線」で検索すればいちばんに出てきます。愛媛県としては瀬戸大橋がなくなると、将来的に四国新幹線が通る可能性がなくなる。どうしてもこれを残したい。逆に新幹線さえ通ってくれば、しまなみ海道はいらないので、当然裏切ります。何が言いたいかと言うと、こんなことは全部検索で出てきます。問題は、それを繋げて今みたいなストーリーが作れるかどうかということなのです。こういったことを最近「コネクティングザドッツ」と言います。点と点を繋げて物語を作っていくかが大事になるわけです。今、情報はいくらでも手に入ります。しかし、それを繋げて物語を作れるかどうか、これからは大事になっていくということです。さて、なぜ、私がこんなことをやっているかと言うと、私は、長く大阪大学に勤務していました。大阪大学は、相当早い段階で、日本の大学入試は、こう変わっていくだろうと予想し

ていました。なぜなら、世界の大学入試が変わっていたからです。大学院の奨学金選抜の試験を使って、世界最先端の入試を作ってみようという実験を行っていました。私は、その出題担当で、毎年チームリーダーで作問をしていました。20名位のプロジェクチームで、いちばん最初に「宇宙兄弟」という漫画があるのですが、全巻購入して、読んでくださいと教員たちにお願しました。宇宙兄弟は、JAXA、NASAの宇宙飛行士を選抜し、育てていく漫画です。皆さんが受けてきた、高校入試や大学入試は、その時点での受験生の知識や情報の量を測って、上から100番は合格。101番以下は不合格としてきました。JAXAは、試験が違います。命のやり取りができるクルー、仲間を集める試験です。いろいろな能力が必要になります。共同体がピンチの時に、ジョークを言って和ませられるかどうか、斬新な意見でピンチが切り抜けられるか、どんな意見を言っても地道な作業に関わっていないと信用されないとか、いろいろな人が必要になります。野球のジャイアンツみたいに、四番バッターばかり集めても勝てないですね。巨人ファンの方がいたら申し訳ないですが、ホームランバッターも欲しいけど、チームスポーツですから、左の変則ピッチャーとか、バンドの上手い奴、足の速いやつとか、いろいろななきゃいけない。グーみたいなやつがいて、チョキみたいなやつがいて、パーみたいなやつがいて、この仲間を集める試験に、日本の大学入試も変わっていくだろうと考えられています。なぜなら、インターネットの時代には知識や情報はいつでもどこでも手に入れられるのです。

ハーバードでもスタンフォードでも日本の京都大学も授業をインターネットで公開しています。コロナ前からです。無料です。要するに知識や情報は囲い込むものではなくオープンにするものです。それでもハーバードで共に議論をすることが大事です。スタンフォードで共に学ぶことが大事なのです。それが大学に残された唯一の役割だというのが世界の先端的な大学の基本的な考え方です。そこでは「何を学ぶか」より「誰と学ぶか」が重要になってきます。

ただこれを実現するのは、日本では大変なのです。理念はわかっても。今、日本で一番大学改革が進んでいる国立大学は、東工大だと思います。今回、女性枠をつくりました。その東工大には悩みがあります。アクティブ・ラーニング導入しているのですが、学生の8割以上が男子。だから、女性枠を作ったのですが、7割は、関東出身で、6割が中高一貫校出身なのです。なので、アクティブ・ラーニングをしても同じような意見しか出てこないのです。アクティブにならないわけです。アメリカでは、すでに従来型の学力でとるのは上位2割と言われていています。あとは多様性で取ります。例えばトランプ前大統領の問題の「トランプ現象」について話し合うときにエリート層だけで話してもダメなのです。「トランプになんか投票して馬鹿だな。」で終わってしまいます。そうではなくて、トランプさんに投票した7000万人の白人貧困層を代表するような学生にもいてもらわないといけない。いろんな地域、いろんな宗教、いろんな民族、いろんな人種、そして男性、女性、LGBT、いろんな方がいてくれないと授業が活性化しない。だから「誰と学ぶか」の構成メンバーが大事になります。本来、今回の大学入試改革の最大の目玉は、ここにあったと思っています。多様性で取るということです。今までの偏差値は、努力が非常に反映しやすい。その意味で、公平な試験です。でも、努力だけを最上の価値にしまうと、これからの日本社会は、困るのです。まず、努力が得意な人だけが出世する社会だと、少なくとも「働き方改革」は、できません。「ちょっと休みましようよ。」という人もいてもらわないと困るでしょう。高度経済成長の時代と違って、要するに社会に多様性を持たないと持続可能な社会にならない。

そもそも、努力が人間の道徳でいう最高の価値なのだというのは、日本だけでしょう。ラテン系の国なら「何、努力しているの。」「もうちょっと人生楽しもうよ。」という人がたくさんいるじゃないですか。そういう多様性をもたせるための試験だということです。さて、そうなると大学側からすると受験準備ができない問題を作るのが難しくなります。高校側からすると、受験指導・進路指導が難しくなります。レゴで巨大な戦車をつくることにA判定もB判定もないです。そうなると、やはり一年の受験準備では対応できない入試になってきます。小・中学校から少しずつでもこういった対話型の教育をしていかないと太刀打ちできない教育になってきます。こういった能力のことを、社会学の世界では「身体的文化資本」と言います。「身体的文化資本」というのは、フランスの社会学者ピエール・ブルデューが提唱しました。センスとかコミュニケーション能力とかです。

消費者教育に携わっている皆さんは、もうお分かりだと思いますが、要するに消費者教育も結局はここに立ち帰ってくるのだと思うのです。騙されないというのは、「誰と学ぶか」に近いのですが、どういう仲間を持っているかが、大きなポイントになってくるのだと思います。

こういった「身体的文化資本」は、20歳くらいまでに形成されると言われています。もうひとつ、身体的文化資本は、「本物」、「いい物」に触れることでしか形成されないとされています。味覚を身につけるのに、おいしい物とまずいもの、安全なものと危険なもの、両方食べさせて、ほらこっちが美味しいでしょうと教える親はいないのです。美味しいもの、安全なものを食べさせることによって危険なもの、不味いものを吐き出す能力が培われます。あるいは骨董品の目利きです。なんとか鑑定団みたいな人を育てるのは、本物、いいものだけを見せ続けるそうです。そうすると偽物を見抜く能力が培われる。「身体的文化資本」は、体に落とし込んで行かないといけないのです。そうだとすると、私がやっている演劇、ダンス、ミュージカル、オペラとかは、東京の子供が圧倒的に有利です。私が住んでいる豊岡は、今、演劇が盛んになっています。それでもアクセスの機会は、数十倍違います。例えば、東京都世田谷区は、週に一回、国語以外の言語活動という時間があります。独自の教科書ももっています。そして、世田谷パブリックシアターという、野村萬斎さんが長く監督やっていた公共ホールがあって、そこに依頼をすると、区の予算でプロのアーティスト、俳優や大道芸人、狂言師が派遣されてきます。もっとわかりやすい例で言うと、今、全国に演劇やダンスが本格的に学べる高校が80校あります。しかし、東京と神奈川にその6割が集中しています。東京、神奈川、大阪、兵庫で8割です。多くの都府県は、教える人がいないのでコースさえ開設できないのです。文化の地域間格差が広がっています。もうひとつの格差は経済格差です。経済格差が教育格差に直結しているのは、皆さんご承知の通りですが、文化格差はもっと深刻なのです。教育格差は、学校に来てくれさえすれば発見されます。この子供は、頭がいいのに家が貧乏で大学に行けなくてかわいそうだなってみんなが思うし、本当に優秀なら奨学金とかで支援してあげられます。でも文化格差は、発見すらされません。親が美術館やコンサートに行く習慣がなければ、子供だけで行くってことは起こらないです。いわゆる意識層の親だったら、私が住んでいる豊岡市でも京都や神戸まで2時間はかかるのですが、夏休みにクラシックが好きだったら親子で聴けるコンサートがあれば、神戸や京都まで子供を連れていきます。美術館も連れて行きます。せめて福知山の科学館には、絶対に連れて行くし、水族館も連れて行きます。でも行かないご家庭はずっと行かないじゃないですか。それから、行

きたくても行けないご家庭もあります。経済的な理由とか、ひとり親世帯だったり、土日が忙しかったりして行く家庭と行かない家庭でスパイラル状に差がついていってしまいます。日本は、明治以降、150年をかけて教育の地域間格差のない素晴らしい国を作ってきました。人口1億人以上の国で、これほど教育の地域間格差のない国はありません。しかし、これが今、文化の地域間格差と経済格差の二方向に引っ張られて、子供たちひとりひとりの「身体的文化資本」の格差が広がっているのです。しかも、これが大学入試や就職に直結する時代になってきました。あるいは、皆さんの消費者教育で言えば、ご承知の方も多いと思いますが、若者の貧困の問題について、専門の方と対談した時に若者の貧困でよくあるケースが20代の方で普通に仕事していたが、体調を崩す、精神面が多いのですが失職して家賃が払えなくなり、ネットカフェで暮らす、それで住所がなくなるので生活保護を受けられない。これが典型的なパターンです。その資料を見せていただきましたが、みんな家賃が高いのです。8万円とかに住んでいる。聞くと専門の方は、「そうなのです。地方から来た子供ほど高い家賃のアパートに住む傾向にあるのです。」なぜかと言うと不動産屋に騙されちゃうからです。でも騙されたとも言えないのです。不動産屋も別に悪気はないのですが、高い物件から勧めます。その時に相談できる友達がいなかったり、知識がなかったりすると東京は、まあこのぐらいかかるかなと思い、初任給は手取り20万そこそこなのに、10万円とか8万円のマンションに入ってしまう。払えますよね。払えるのです。でも、いざ失職すると3万円、4万円のアパートに入っている時と8万円、10万円のマンションに入っている時で全然違うのです。失職しても手取り10万や15万なら稼げます。だったら3万、4万の家賃は払えます。でも8万、10万のマンションだったら払えません。地方の子供ほど、要するに情報に弱いから、マンションとかを半ば押し付けられてしまうのです。こういうところにも地域間格差、要するに文化の地域間格差が明らかにあります。あるいは、人的ネットワークの薄さが表れてくるといことです。皆さんの中にも地方出身の方が多いと思いますが、私がやっている小劇場演劇、昔でいうアングラ演劇とか、ジャズ、コンテンポラリーダンスは東京とか、大阪とか都会に出てから、大学に入ってから触れるものでした。私たちの世代までは、あーやっぱり東京はすごいなあと思ってたらそれでよかったと思うのです。でも、大学入試段階でこれを問われるようになっちゃったら、田舎の子に逆転のチャンス無いじゃないですか。君、センスないから東京来れないよって話です。3年ほど前に当時の羽生田文科大臣が「身の丈発言」をして、国会で大変な問題になりました。文科省の方、思い出したくもないような話だと思いますが、これは英語の外部試験を離島の子供が何度も受けられるようにしてください、頑張ってくださいってお願いしたいに励ますつもりだったのだと思うのです。身の丈にあったと言わなければ良かったと思うのですが、言っちゃったので大問題になりました。ただ、これを追求する野党は、もう全く論点が分かっていなかった。文科省の大学入試改革が間違っているとしました。そうじゃないのです。大学入試改革は、やらないとダメなのです。大学に多様性を持たせるために、いろいろな尺度で入試をしなければならないのです。そうすると、大学側は、どうしても「身体的文化資本」を問う入試にせざるを得ないのです。でもそうすると今度は東京の子供が有利になってしまいます。でも、だからやめるっていうのは変な議論です。だって、大学がぼしゃったら国がつぶれますからそうはいかないのです。やらなきゃいけない、だとすれば追求する野党の側は、この大学入試改革は必要だ。しかし、これだと地域間格差が広がるから、より地域に教育予算を

増やし、そして教育政策と文化政策を地域と連動させて、子供たちひとりひとりの「身体的文化資本」が育つような教育に変えていくべきじゃないかと指摘するべきだったと思うのです。しかし、野党が論点を全くわかってなかったのが、変な議論になり、大学入試改革を歪められてしまったということなのです。ここを変えていかなければということなのです。これ以上は、今日の趣旨から外れていくので飛ばします。

なぜコミュニケーションか、演劇かについて少しだけ話をさせてください。これはお茶の水女子大学の教育統計の浜野崇先生が、平成 29 年の学力テストの追跡調査で家庭環境を調べた調査です。SES が家庭環境です。所得、両親の学歴です。残念ながら SES の高い家庭の子供ほど学力テストの正答率が高い、これは前回の調査でも分かっていました。今回分かったことは、結構バラつきがあるということです。お金持ちの家の子供でも成績悪い子がいる。困難な家庭の子供でも成績の良い子供もいる。当たり前ですが、富裕層のばらつきは少ないのです。貧困層のばらつきが大きいということが分かりました。要するに無理して塾とか行って成績をあげているということです。だから、自然状態だと結構ばらつきあります。もちろん遺伝とかもあるのですが、ばらつきはあります。そして、最近注目を集めているのが、非認知スキルというものです。これは、自制心、意欲、忍耐力、やり遂げる力です。これもご承知の方も多いと思いますが、消費者教育と非常に関連があるのです。特に自制心の部分は、要するにその消費者教育でいろいろしても元々のこの部分が育ってなければ、それは意味をなさないわけです。さて、この非認知スキルは、学力と緩やかな相関性があります。それは、そうです。集中力の高い子供は、成績が高いです。そして非認知スキルは SES とあまり関係がない。要するにほとんどの子供が等しくバラバラに持っていますということです。そこで浜野先生は困難な家庭に育って、成績の良い子供は、特定の非認知スキルが高いのではないかという仮説を立てて追跡調査をしました。そこで分かってきたことは、困難な家庭に育って成績の良い子供の特徴は、物事を最後までやり遂げて嬉しかったことがある。

難しいことでも失敗を恐れないで挑戦している。

自分には良いところがあると思う。

友達の前で自分の考え、意見を発表することは得意だ。

友達と話し合うとき、友達の話最後まで聞くことができる。

友達と話し合うとき、友達の考えを、受け止めて自分の考えをもつことができる。

さらに、学級会などの話し合いの活動で、自分と異なる意見や少数意見の良さを生かしたり、折り合いをつけたりした話しや意見をまとめて、学級みんなで協力して何かをやる時は嬉しかったことがある。

非認知スキルは、「だからしつけが大事」みたいな感じで最初に保守派の方が注目したのです。でも集中力をつけるために子供を正座させて 30 分ドリルやらせるとかは、あまり効果がなくて、みんなで何かして楽しくて達成感があって、拍手を浴びる。こういうことの繰り返しで、非認知スキルを高め、これが学力にも繋がっているということが最近分かってきました。同じ浜野先生の統計で小学校 6 年生の学力テストの上位 25% の A 層と下位 25% の D 層の家庭環境を比べた表です。いちばんは、家に本がたくさんある 24. ポイントの差、子供が小さい頃、絵本の読み聞かせをした 17.9 ポイント。これは、当たり前です。面白いのは、博物館や美術館に連れて行く 15.9

ポイントです。これは、毎日子供に朝食を食べさせた 10.4 ポイントより全然上なのです。ですから、子供の成績上げたかったら、朝ごはん食べさせるより美術館に連れて行けという話です。ショックなのは、ほとんど毎日子供に勉強しなさいが-5.7 ポイント。気をつけてくださいね。まったく逆効果です。もっと親にとってショックなのは、子どもの勉強を見て教えている 0.9 ポイント、算数に至っては、-1 ポイントです。効果がないわけではないのです。でも教え方がまずいと逆効果になってしまいます。一方で、子供が英語や外国の文化に触れるように意識しているのは、国語で 17.5 ポイント。でも、濱野先生の統計で幼稚園時代の子供を英語の塾に通わせていた子供は、中学校での英語の成績と全く相関性がないというデータもあります。要するに、高いお金を払っても嫌いになってしまったらマイナスになるので、統計上相殺されてしまうと思うのです。ご承知のように子供は好奇心さえもてば自分で学んでくれます。家には本がたくさんある、これは子供の蔵書でなく、親の蔵書です。意味のわからない本がたくさん本棚に並んでいる方が良いのです。何が書いてあるか子供は好奇心を持つからです。さあ、そうなるとこの子供たちどういう子供たちか分かってくると思います。最近、皆さん学び合い、特に消費者教育の場合には学び合いという手法よく使われると思います。学び合いは、どういうことかという子供は、教員の言うことより友達の成功や失敗、友達の意見からたくさん学んでいるということです。これも有名な図ですね。一方的な講義が半年後、一年後、覚えているのは 5% ぐらいです。プリントにすると 10% です。AV 機器を使うと 20%、実験授業だと 30%、ディスカッション入れると 50%、体験学習にすると 75%。でもいちばんいいのは、他人に教えた経験で 90% の記憶が残ります。要するに困難な家庭に育っても、成績の良い子供たちは、どういう子供かイメージがつかめると思うのです。隣の子供にこっそり教えている子供です。それはその子供の心根の優しさで隣の子供にこっそり教えているのですが、その教えるという行為が、その子の脳にフィードバックして長期記憶につながっている。だとしたら、従来言われてきた受験に強い、競争に強い子供よりも隣の子供にこっそり教えてあげる心根の優しい子供を育てませんか。その方がその子供の成績も上がるし、クラス全体のパフォーマンスも上がるのです。

そういう学級運営、そういった非認知スキルを伸ばす教育を低学年でやっておくということが、最終的に学力にも繋がるし、多様性も確保できます。学力というのは、学ぶ力です。学んだ結果ではないわけです。これからは、大学入試さえも学んだ結果を測る試験から学ぶ力を測る試験に変わっていくわけです。幼・保、小学校低学年から、学ぶ力をつけてあげれば、塾に行かなくても自分で学びます。だから、困難な家庭に育った子でも、成績のいい子が一定数います。この子供たちは、学ぶ力が強い子供です。この学ぶ力の強い子供を育てることが、これからの日本の学校教育で非常に必要になってくるのではないかと。そう考えると文科省が提唱してきたこの「学力の三要素」というのも、逆なんじゃないかということです。文科省は知識や技能を土台にしてとずっと言ってきました。これは基礎学力か、ゆとり教育かという不毛な議論があった頃の 2008 年に初めて文科省が提唱した基礎学力も大事ですけど、こういうのも大事ですよみたいな非常に文科省らしい提案だったわけです。これは、その時代には意味がありました。でも、今はこれが逆なのではないかということです。皆さん反転授業という言葉は、よくお聞きになっていると思います。家でインターネットなどで予習をして、学校でアクティブ・ラーニングのディスカッション型の授業をしますということです。これ何が反転したかっていうことをおさえておいていた

だきたい。今日は教員の方もたくさんいらっしやっていると思いますが、これは今まで教師や学校がもっていた権威・権力の源泉が反転したのだと思います。これまで教員が知識や情報を抱えもっていたから、子供たちは学校に来ざるを得なかった。学校に行くことでしかそれを得ることができなかったのです。しかし、知識や情報は今、世界中、どこでもいつでも子供たちは手に入れることができます。しかもそれがコロナで「バレ」てしまいました。あの全国一斉休校措置の時に、多くの子供達は「こんなだったら、学校行かなくていいじゃん。」と思ったと思います。先生方にちょっと厳しい言い方をさせて頂くなら、「こんな授業なら学校行かなくていいじゃん。」とも思ったと思います。でも違いますよね。学校でしかできないことがあるはずなのです。学校でしかできないのは主体性、協働性、多様性を育むことです。知識や情報はいつでもどこでも手に入れられる。でも、主体性、多様性、協働性はオンラインでは無理です。もちろん、オンラインで様々なことを補完することはできますが、基本的には学校の対面でしかこの主体性、多様性・協働性は育ちません。このコロナで子どもたちの学ぶ機会は著しく損なわれました。いいことなんて何もなかったと思います。でも、このコロナを奇貨として、私たち大人が子供達に何かしてあげられることがあるとすれば、この学校本来の力を取り戻すことなんじゃないか。学校でしかできないことを取り戻すことなのではないかと思います。その時に、私達がやっている演劇教育とか、コミュニケーション教育も多少役に立てるのではないかなと思います。さて、私が暮らす豊岡、但馬は、東井義雄先生という偉大な教育者を生んだ地域です。東井先生のことをご存じない方、検索してみてください。東井先生は、昭和 30 年代に「村を育てる学力」、「村を捨てる学力」の概念を提唱なさいました。いちばん有名などころでは、通信簿を相対評価から絶対評価に変えた最初の方です。昭和 30 年代、教員の評価は、どれだけ東京、大阪に若者を送り出すかの時代に、こんなことをしていたら村は、どんどんどんどん廃れていってしまうじゃないか。それよりも自らの共同体を守る、発展させることができる学力をつけて行くべきじゃないかと東井先生はおっしゃいました。その基盤には、東井先生がお寺の僧侶でもあったので、愛のある教育ということをずっと訴えていきます。学力だけではなくて、地域への愛、そして共同体への愛、他者への愛がその基盤になるのではないかというのが東井先生の教えでした。さて、皆さんご承知のように、学習指導要領では主体的・対話的で深い学びということが言われるようになりました。これ「主体的に」は分かるのですが、対話的とは何だ、対話ではなく「対話的」はあまり使わないです。それから「主体的」と「対話的」は、時に相反するのではないかということです。「深い学び」これもちょっと何だか分からないです。深い方がいいに決まっています。主体的で対話的で浅い学びとは絶対に文科省はいえないですから、深い学びとは何だということです。フランス革命の理念は自由・平等・博愛です。自由と平等は相反するのです。自由を優先しすぎると格差が生まれます。平等を優先しすぎると、社会主義国のように個人の人権を抑圧せざるを得ない場面が出てきます。フランス革命がすごく面白かったのは、そこに「博愛」という少しふあっとした概念を入れたことです。だとすれば、「主体的・対話的で愛のある学び」と言い換えたほうが僕はいいのではないかと思います。ただ、これは、文科省として採用しにくいと思います。もうひとつ、今日は深く触れませんでした。この演劇的手法を使ったコミュニケーション教育で重視しているのは、「empathy」という考え方です。「sympathy」というのはかわいそうな人がいたら、かわいそうだなと想う心から出てくる感じです。こういうものも植え付けなきゃいけない。

しかし「empathy」は、異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人の行動を理解する能力や態度のことです。例えば、さっきのトランプさんの話で言えば、トランプ前大統領の支持者が国会議事堂に乱入しました。私たちはあの乱暴者を全く許容できないけれども、トランプさんに投票した 7000 万人の白人貧困層の寂しさや悲しみについては理解に努めないといけない。同意はしないけど、理解に努める。これが「empathy」です。これからの、日本の学校教育で最も重要なのは、この「empathy」(共感)というもので、異なる価値観、異なる文化的な背景をもった人の行動を理解する。同意はしないけど理解すると言うことです。だとすれば、この主体的・対話的で深い学びというのは、主体的・対話的で共感のある学びと言い換えてもいいのではないかと。この共感がないところに主体性や多様性だけを植えつけても主体性が強すぎると対話的ではなくなります。対話性を重視しすぎると、日本の子供達と同調圧力が強くなり、「ああそれもいいです。」「それもいいですね。」で終わってしまいます。皆さん、ぜひ一つだけ覚えていただきたいのは、消費者教育は本当に色々やられていると思うのです。ただ、残念ながら、日本の子供達は、アクティブ・ラーニングといってもなかなか対話的にならない。やはり、同調圧力が強い中で、ずっと授業を受けてきています。そこで大事なのは「フィクションの力」です。ひとりひとりの立場をきちんと明確にして、先ほどの兵庫県とか愛媛県の代表を決めるように、対話的にせざるを得ないような状況を作ってあげてください。この「フィクションの力」が、実は消費者教育とかロールプレイにはいちばん大事なものの一つです。そこにユニークネスとか、ちょっとユーモアとかそういうものも必要になってきます。今日の行政の施策説明を聞いて、私はちょっと場違いな所に来たなと思いました。とても真面目な説明をなさっていましたね。当たり前です。行政官ですから、真面目にやってもらわないと困るのです。でも、これ変じゃないですか。だって真面目な人ほどだまされるのでしょうか。だったら、消費者教育を真面目にやっちゃダメじゃないですか。ちょっと不真面目さとかフィクションを入れていただくというのは、実は重要なことなのではないかと思えます。もし私が今日、呼ばれた価値があるとすれば、その不真面目さとか大げささです。上沼恵美子さんが非常に良いことをおっしゃられていました。芸人というのは嘘をついちゃいけないが、「ほらをふく」んだと。人を楽しませる「ほら」は、いくらついてもいいけど嘘を言っちゃいけない。この区別をつけるということは、とても大事なことだと思うのです。そのことをぜひ考えていただいて、多少なりとも参考になればと思います。駆け足になりましたが、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。